

全くない。そのため、死神の位置の設定も必要なくなっていて、実際、それは欠落している。ラストも、少し「まじめ」なハッピーエンドになっていて、グリムや落語とは、かなり距離がある。これに比べると、グリムと落語とが互いに互いに近いという事がよくわかる。これを見ると、落語「死神」は、グリムから直接作られた可能性は高いと思われる一方、オペラ「クリスピーノ」から作られたとは考えにくい。特に、グリムから「クリスピーノ」を経て、落語が作られたとする、オペラの段階で、一度、大きくグリムから遠ざかった物語が、落語で、再び、(偶然に)グリムに近づいた事になり、それは、あまりにも不自然である。では、落語のルーツが「クリスピーノ」であるという説は、何を根拠に生まれたのだろうか。

### 「クリスピーノ」ルーツ説の出所

先に引用した「クリスピスノ」とまちがった表記のある記述のうち、もつとも古いものは、(今村四)の記述である。だが、残念ながら、この年代に活躍された人達は、仮にご存命の方がいても、極めてご高齢であり、直接取材するのは難し

い。また、先に引用した記述を見ても、今村氏の記述を除けば、「…という」「…そうだ」「…といわれる」「…と思われる」「…らしいという」と、どれも、根拠がはっきりせず、検証ができていない事を認める表現になっている。

(飯島)の中の飯島氏との対談の中で、六代目円生が語っているところによれば、落語「死神」を最初に高座にかけたのは、円朝の弟子の円左(初代 一八五二—一九〇九)であり、それが、二代目金馬、初代円遊らへ受け継がれていったという。彼らの師匠の初代円朝は、明治初期に活躍した名人であり、数々の創作を遺し、また、代表作「怪談牡丹燈籠」等、外国作品の翻案があり、中には、「錦の舞衣」(円朝二)のように、イタリアオペラと共通の題材もある(詳しくは後述)。そんな中で、グリムを知らずに、落語「死神」と似たイタリアオペラを見つけた人がいたら、「落語『死神』は円朝がオペラから作ったのだろう」と言い出しても、不思議は無いのではないだろうか。そして、それが、検証もされないまま、多くの文献に、そのまま、受け継がれていったのではないだろうか。オペラのタイトルが、「クリスピスノ」と間違っただけのまま受け継がれているのも、全く検証がされていない事の証拠である。